

宝くじ おもしろ話

東京オリンピックと宝くじ

新年とともに2020年開催のオリンピック東京大会がグッと近づいてきた感じだが、1964年に開催の東京大会と現在の宝くじとは、宝くじの歴史上、深いつながりがある。

先の大会の開催決定とともに、宝くじも開催の資金面で協力することに。その方法は宝くじ券のデザインに五輪マークを印刷。その使用料として発売額の2%相当額をオリンピック組織委員会に納めるというものだった。

五輪マークを最初に券面へ印刷したのは昭和34年12月31日から発売の第244回東京都宝くじ。続いて翌35年4月1日から発売

の第135回関東・中部・東北自治宝くじと第170回近畿宝くじと第57回西日本宝くじの3つ。最後は5月21日から発売の第25回全国自治宝くじだった。そして、これは昭和39年6月まで続いた。

ところで、このマークの印刷を機に、すべての宝くじ券のサイズをタテ7cm×横15cmに統一することとなり、昭和35年4月から実施された。

これは宝くじの発売業務上、画期的なことで、宝くじ券の印刷、発送、販売、抽せん後の当せん券管理などの各業務上において、格段の効率化、合理化がはかられた。宝くじ券のこのサイズは、いまでも変わっていない。



ご当地クーちゃん
都庁クーちゃん

当せん者エピソード

宝くじ こぼれ話

ハッピー！二人のお母さん 母子手帳とイニシャルで幸運

「宝くじって、すばらしいなあ」「宝くじって、ほのぼの、あったかいなあ」というエピソードだ。

母子手帳 大阪府の主婦I子さん(28)は独身のときからナンバーズ4を買っており、結婚後も「ほぼ毎回購入」というほどのファンだ。そんなI子さんだが、初めての赤ちゃんが生まれてからは、わが子との母子手帳にちなんだ4通りの数字でナンバーズ4のストレートに挑戦。「当たったら、子供に…」とあれこれ夢見て買い続けたところ、ついに第3720号・ナンバーズ4で的中。当せん金は121万500円。

「初めての当せんで、うれしいです」と目に涙を浮かべながら喜ぶI子さんだった。

イニシャル 群馬県の主婦M子さん(36)は5年来の宝くじファン。いつも、あれこれとこだわって買っているが、ある日、テレビを見ていたら、宝くじ情報番組でツイている人の「イニシャル」を紹介していた。それが、なんと、4歳と2歳のわが子のイニシャルとぴったり一致。ヒラめいたMさんはさっそく2人を連れて売り場へ。そして、発売中の年末ジャンボ宝くじ(第651回全国自治宝くじ)を子供に選ばせて20枚購入。抽せんの結果は1枚がうれしや3等の100万円に当せん。「大手柄です」とわが子を自慢するM子さんだった。



ご当地クーちゃん
草津クーちゃん